

### 公開研究会

#### 第7回 甲南アーツ&セラピー研究会

「カナダの教育・医療の分野でのアート・セラピーの実践」

日時:2015年7月11日(土)14:00~17:00  
場所:甲南大学18号館3階講演室  
講師:上原 英子先生  
(心理療法家・カナダBC州公認臨床カウンセラー/カナダBC州公認アートセラピスト)  
司会:三脇 康生(仁愛大学教授 多文化間精神医学会理事)

甲南アーツ&セラピー研究会では、第7回研究会として心理療法家の上原英子先生をお迎えしました。上原先生は、カナダでご活躍中の臨床心理カウンセラー、アートセラピストです。今回は「カナダの子どもホスピス」などについて、お話をうかがいました。



本講演会はJSPS科学研究費助成事業(課題番号25284046)「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表:川田都樹子)の助成を受けたものです。

#### 「トラウマと死せる言語の美しさ —キーツとフロイトにおける〈想起〉と〈記憶〉の競合—

日時:2016年2月13日(土)15:30~  
場所:甲南大学18号館3階講演室  
講演者:デヴィッド・ミラー氏  
(マンチェスター・メトロポリタン大学、文学とトラウマ研究所所長、「文学とトラウマ研究」誌編集主幹)



記憶とトラウマ、そして文学的な創作活動はどのように影響し合うのでしょうか?デヴィッド・ミラー氏は、19世紀初頭の英国詩人ジョン・キーツの詩を題材にフロイトの精神分析における「悲哀とメランコリー」という考えと、キーツの「憂愁(メランコリー)についてのうた」をとりあげながら、近代の詩におけるトラウマと詩の美学について論じました。その議論で鍵となったのは「想起」と「記憶」の概念の違いです。フロイトは記憶のもつショックや苦痛に圧倒されることに対する防衛の働きとして、現実原則や想起の働きを考察しましたが、他方で、キーツは、詩的言語によって、現実や日常で見慣れた言葉を見知らぬものにして、いったん自然や言語や記憶を死んだものとみなします。キーツは、それに対するメランコリックな眼差しを通して、新たな言語の星座や配置を造り直すことに、美や真実を見いだしました。こうした記憶の痕跡の場所を引き受ける態度は、心理学におけるメランコリーの病理的な理解を超えるものだと考えられます。質疑では、精神分析学や臨床心理学からの視点も提示され議論が活発に行われました。また、文芸(批評)の視点から、精神分析や心理学のテキストを読むことの意義について特に盛り上がりました。トラウマと文化研究に関する関心が高まりつつある昨今、とても有意義な会になりました。

### これからの活動

#### 公開研修会

第13回KIHS心理臨床ワークショップ  
「NET(ナラティブ・エクスプロージャー・セラピー)を学ぶ  
—人生史を語るトラウマ治療—(一日半コース)」

日時:2016年3月12日・3月13日(土、日)  
場所:甲南大学18号館3階講演室  
講師:森 茂起(甲南大学文学部・人間科学研究所/臨床心理学)  
助言者:森 年恵(甲南大学非常勤講師)  
後援:兵庫県臨床心理士会

#### 公開研究会(協力)

第8回甲南アーツ&セラピー研究会  
「これからのダンスと健康について語ろう」

日時:2016年3月30日(水)  
場所:甲南大学18号館3階講演室  
座談会:砂連尾 理(コンテンポラリー・ダンサー)  
内藤 あかね(甲南大学心理臨床カウセリングルーム)  
石谷 治寛(甲南大学人間科学研究所博士研究員)

本講演会はJSPS科学研究費助成事業(課題番号25284046)「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表:川田都樹子)の助成を受けたものです。

甲南アーツ&セラピー研究会では、この度コンテンポラリー・ダンサーとしてご活躍されている砂連尾さんをお呼びして、ダンスと健康についての座談会を行います。砂連尾さんは、コンテンポラリー・ダンサーとして長年ご活躍されておりますが、2007年に障がい者との舞台作品を制作されたことをきっかけに、ドイツ研修時にベルリンの障がい者カンパニーと国際共同プロジェクトを行い、また近年は知的障がい者の施設や老人介護施設、子どもとのワークショップの活動を定期的に行ってまいりました。今回は来聴者との簡単なワークショップも指導していただきながら、これまでの経緯やコンテンポラリー・ダンスの可能性についてうかがいます。そこから話を広げて、ダンスと健康、日本の福祉についてなど、気軽に話すことのできる場にしたいと考えています。ふるってご参加ください。

発行年月日:2016年3月10日

### 編集後記

本年度の9月には故港道隆先生の追悼会が催されました。港道先生の留学時代の盟友である鶴岡哲先生からは、留学時代の面影や哲学的な偉業が振り返られ、森茂起先生からは、人間科学研究所での共同研究の取り組みや所長を務めた知識人としての責任感が語られ、教え子の方々からは教師としての顔が偲ばれました。本年度の研究所紀要『心の危機と臨床の知vol.17』では、港道先生追悼特集号として、多くの投稿論文を収録しましたので、あわせてご覧いただけましたら幸いです。



<http://www.konan-u.ac.jp/kihs/>

昨年度から「甲南アトリエ」と題して、子ども・お年寄り向けの公開のアートワークショップを行っており、ご好評をいただいております。今号ではその報告を掲載しました。KIHSは地域を中心とした実践活動や子育て支援に、ますます注力しながら、研究活動に取り組んでいきたいと考えております。今後とも、ご指導のほどよろしく申し上げます。



# 活動報告

## ●2015年度の活動

### 公開シンポジウム

#### 震災20年シンポジウム

##### 「大災害の長期的影響を考えるートラウマと喪失からの復興」

日時:2015年11月28日(土)13:00~17:30

場所:甲南大学5号館511教室

話題提供:岩井 圭司(精神科医師・兵庫教育大学大学院教授)

高石 恭子(甲南大学文学部教授・学生相談室専任カウンセラー)

富樫 公一(甲南大学文学部)

森 茂起(甲南大学文学部)

司 会:森 茂起

平成27年は、平成7年の阪神淡路大震災から20年目という節目の年にあたります。これをうけて、この震災と復興を、研究所の歩みとともにふりかえるために、公開シンポジウムを開催しました。甲南大学は大震災、在学生17名を失ったことをはじめ、甚大な被害を体験しました。平成10年に設立された人間科学研究所は、震災の経験を背景に、「現代人の心の危機の見極めと、その実践的解決のためのネットワーク形成」を目的として活動してきました。20年という節目の年に震災と復興の20年をふりかえるとともに、他の大災害にも視野を広げ、大災害の長期的作用の理解を深めました。

高石恭子先生は、学生相談室での経験から、相談者と被災体験を共有することの難しさについて語られ、岩井圭司先生は災害を記念碑として残したり、語り継いだりする場の必要性について述べました。富樫公一先生は、2011年9月11日の自らの体験について振り返りながら、それを体験したニューヨーク在住の臨床家たちのトラウマ後の成長についての発表を行いました。森茂起先生は、これまで研究所の活動で行ってきた兵庫県での戦時中の疎開体験に関する聞き取り調査の経験から、記憶を語ることの意義についてお話されました。討議では、「なぜ震災は語りづらいのか」についてを見据えつつも、それを語っていくことの大切さを確認しました。



### 公開シンポジウム

#### 「認知症の方とその家族の「生きる」を支えるために」

日時:2016年2月28日(日)13:00~16:30

場所:甲南大学岡本キャンパス18号館3階講演室

研究発表:岡田 憲(社会医療法人石州会六日市病院)

伊藤 光(医療法人社団弥生会旭神経内科リハビリテーション病院)

司 会:富樫 公一(甲南大学文学部)

指定討論:豊田 英嗣(社会医療法人清風岡山家庭センター日本原病院)

超高齢化社会に突入し、医療や介護制度など目まぐるしく変わる中で、高齢者医療をどのように推し進めていくのが大きな課題となっています。国の施策として在宅療養支援の方策が打ち出される一方で、地域医療の整備は十分とはいえません。医療従事者が不足する地域においては、在宅医療チームを構成することは簡単なことではありません。認知症医療の中で私たちが担う役割とは何でしょうか。へき地在宅療養中の認知症患者について行った調査研究の結果を基に、議論を行いました。

### 事例検討会

#### 「質的研究法を用いた事例検討」

日時:2015年6月7日(日) 10:00~17:00

場所:甲南大学18号館3階講演室

ファシリテーター:宮川 貴美子・南野 美穂

日本で生まれた質的研究法であるKJ法を用いて、①パルス討論・探検ネット作り(小グループでのブレインストーミングを視覚化して、データを出し尽くし、状況を把握する)、②多段ピックアップ(出尽くしたデータから「なんだか気になる」を大事に③で扱うデータの数を絞っていく)、③狭義のKJ法1ラウンド(絞られたデータを使って事例の本質を追求する)の手順で時間をかけて一つの事例にじっくり取り組むためのワークショップを行いました。

### 公開講座

#### 第5回 子育て支援者スキルアップ講座

##### 「アタッチメントに基づく親子関係支援」

日時:2015年5月16日(土)13:30~15:00

場所:甲南大学18号館3階講演室

講師:北川 恵(甲南大学/臨床心理学)

#### 第6回 子育て応援講座

##### 「子どもの安心基地になるために」

日時:2015年6月25日(木)10:30~12:00

場所:甲南大学18号館3階講演室

講師:北川 恵(甲南大学/臨床心理学)

引き続きCOSプログラムを継続して行っており、新聞で取り上げていただくなど、好評を頂いております。

### 甲南アトリエ

#### 「第2回親子孫子で楽しむアート

##### ～和紙を使った紙版画に挑戦～」

日時:2015年7月18日(土)10:00~12:30

講師:棕田 三佳(美術家)

企画:内藤 あかね

(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員)



#### 「第3回親子孫子で楽しむアート

##### ～和紙でランプシェードをつくる～」

日時:2016年1月30日(土)10:30~12:30

講師:棕田 三佳(美術家)

企画:内藤 あかね

(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員)



2015年7月18日土曜日。台風の影響で開催が危ぶまれたが、予約者のほとんどが来場され、主催者としては安堵のうちに「第2回親子孫子で楽しむアート」を開始した。今回は、前年度3月に同じ趣旨で行った「第1回親子孫子で楽しむアートー和紙を使った体験型ワークショップ」の続編に当たり、講師の水墨画家、棕田三佳さんのご指導の下、和紙を用いた版画制作を行った。参加者はすべて親子ないし親子孫でいらしたので、家族単位で座っていただいた。今回の課題は紙版画。紙を自由に切り抜いて、台紙に貼り付けて版をつくる。デザインを考え、下絵を描いて紙を切り抜いたり、レースペーパーや紙紐をデザインに利用したりして台紙に貼り付けていく。想像力も根気も求められる作業だが子どもも大人も集中して取り組んでいた。版が出来上がると、今度はローラーを使って版の上から絵の具を塗っていく。ダイナミックに塗る人もいれば、摺ったときに模様がきれいに出るように色

分けなどに注意して塗る人もいた。ここまでは個人制作だが、版に色を載せた人から長さ約3メートルの和紙に刷り上げていく。このような大判の美濃紙に一般人が触れる機会はなかなか無いと思われ、また同じ空間で創られた版画をコラージュ様に刷って一つの作品に仕立てることも一回きりの体験として面白いものになったと思われる。モチーフとしては花や人物があったり、抽象的な模様があったりで色づかい同様いろいろなのだが、和紙のもつやさしい表情に包まれて違和感なく収まっているように見受けられた。制作のスピードの違いや人数の関係で作品は二つになったが、完成した共同版画を会場の壁に貼ると壮観であった。皆で眺めながら感想を言い合うと、子どもたちはイメージが形になったことを喜んだり、困難な場面を乗り越えて制作できたことを語ったりして、一人ひとり体験を言葉にしてくれた。親は子どもを手伝いながら自分の制作にも打ち込む大変な2時間半だったと思うが、なべて満足げな表情で感想を述べていた。時間に余裕のあった人は、版に二度目の色を載せて個人作品を仕上げられたので、共同制作の思い出とともに持ち帰っていただいた。

2016年1月30日、今年度第2回目となる「第3回親子孫子で楽しむアート」では、引き続き棕田さんに講師をお願いして和紙を使ったワークショップを行った。今度はいろいろな色の和紙を紙紐の状態にして風船の周囲に巻き付け、特殊な糊で固めた後に風船を萎ませて取り出し、ランプシェードにして小ぶりのLED電球に被せるという課題に取り組んだ。和紙以外にもソフトペーパー(通称「おはな紙」)を細く裂いてこりを作り、それを糊でつないで紐状にして使った。ソフトペーパーは和紙の淡い色合いにはない濃色もあって、子どもたちも喜んで自分好みの紐を作っていた。地道な作業の後に風船を膨らませる工程に入ると、風船遊びを始める子ども、作業に飽きて落き始める子どももいたが、家族やスタッフの介入で制作に戻り、それぞれ作品を完成させることができた。ランプシェードだけでなく、スチールワイヤーでできた小籠に和紙を貼り付けてランプを制作した子どももいて、学童期や就学前の子どもでも短時間にここまで成し遂げられるのだとスタッフ一同感服した。最後に部屋を暗くして暗幕を張ったスペースにランプを集め点灯すると、参加者から感嘆の声が上がり、紐と紐の間から見える小さく美しい灯りの揺らめきに魅入られるひとときを分かち合った。



(内藤 あかね)